

## 3Dプリンタ世界市場に関する調査を実施（2016年）

ー産業用ハイエンド 3D プリンタ好調 最終製品の造形が進むー

### 【調査要綱】

矢野経済研究所では、次の調査要綱にて世界の3Dプリンタ市場の調査を実施した。

1. 調査期間:2016年9月～11月
2. 調査対象:3Dプリンタメーカー、販売代理店、造形サービス事業者(サービスビューロー等)、ソフトウェア関連企業等
3. 調査方法:当社専門研究員による直接面談、電話・e-mailによるヒアリング、ならびに文献調査併用

#### <3Dプリンタとは>

本調査における3Dプリンタとは、3次元データをもとに樹脂や金属などの積層によって、立体物を造形する装置を指し、主な製品タイプとしては造形方式や使用する材料の違いにより、熱溶解積層方式、光造形方式、粉末焼結方式、インクジェット方式などがある。

### 【調査結果サマリー】

#### ◆ 2015年の世界の3Dプリンタ出荷台数は前年比72.7%増の19万台

2015年の世界の3Dプリンタの出荷台数(メーカー出荷数量ベース)は前年比72.7%増の19万台となった。市場は60万円未満のローエンド3Dプリンタと60万円以上の産業用ハイエンド3Dプリンタの二極化が進んでいる。出荷台数を牽引するのはローエンド装置で、簡易かつ迅速に試作を行うための導入が進む他に、教育機関での導入が増加基調にある。

#### ◆ 世界の3Dプリンタ出荷台数は2019年に215万台へ拡大と予測

3Dプリンタの性能は近年、かつてないスピードで進化している。装置の性能向上、新しい材料の誕生、製造現場などへの更なる普及により、市場は今後も大きく拡大する見通しである。これらを背景に、世界の3Dプリンタ出荷台数は、2013年から2019年までのCAGRは77.0%で推移し、2019年における出荷台数(メーカー出荷数量ベース)は215万台になると予測する。

#### ◆ 日本国内で3Dプリンタを使用して造形しているもの/用途は、「治具」が24.7%、「最終製品(の一部)(パーツなど)」が20.1%、「金型」が16.9%

本調査に関連したアンケート調査で、日本国内の3Dプリンタユーザー154人に対して、3Dプリンタで造形しているもの/用途を尋ねた。回答は、「試作品」がトップで59.1%であった。続いて、「治具」が24.7%、「最終製品(の一部)(パーツなど)」が20.1%、「金型」が16.9%となっており、アンケート調査の結果からは、国内においても3Dプリンタを用いた本格的なものづくりが始まりつつあると言える。

#### ◆ 資料体裁

資料名:「2016年版3Dプリンタ市場の現状と展望」  
 発刊日:2016年11月30日  
 体裁:A4判228頁  
 定価:150,000円(税別)

#### ◆ 株式会社 矢野経済研究所

所在地:東京都中野区本町2-46-2 代表取締役社長:水越 孝  
 設立:1958年3月 年間レポート発刊:約250タイトル URL: <http://www.yano.co.jp/>

本件に関するお問合せ先(当社HPからも承っております <http://www.yano.co.jp/>)

(株)矢野経済研究所 マーケティング本部 広報チーム TEL:03-5371-6912 E-mail: [press@yano.co.jp](mailto:press@yano.co.jp)

本資料における著作権やその他本資料にかかる一切の権利は、株式会社矢野経済研究所に帰属します。  
 本資料内容を転載引用等されるにあたっては、上記広報チーム迄お問合せ下さい。

## 【 調査結果の概要 】

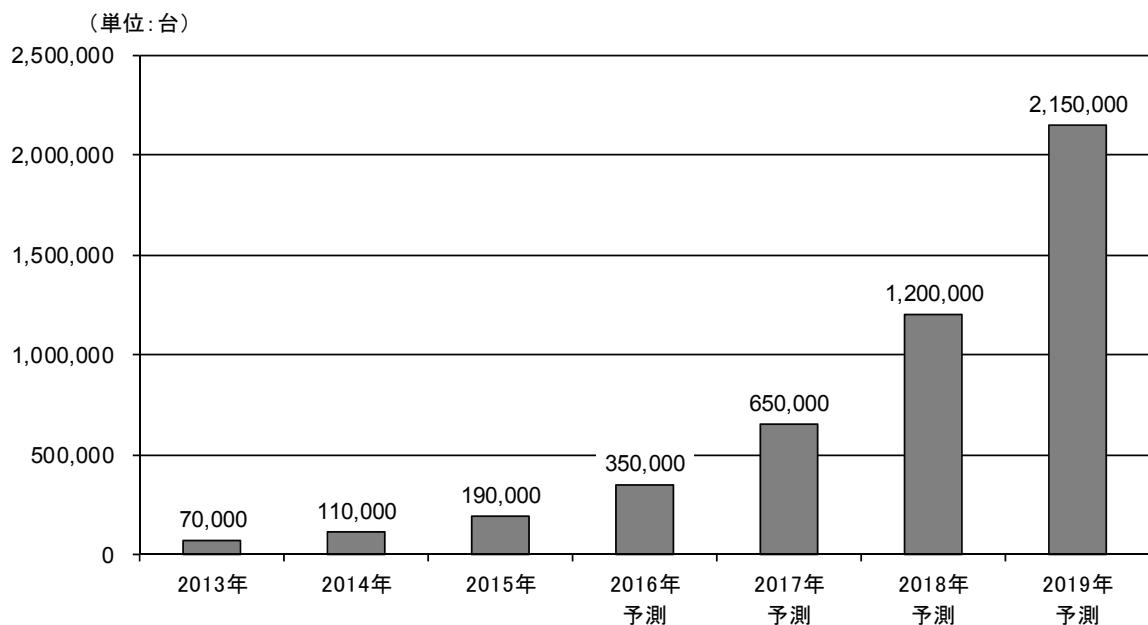
### 1. 市場概況と今後の予測

2015年の世界の3Dプリンタ出荷台数(メーカー出荷数量ベース)は、前年比72.7%増の19万台となった。市場は、60万円未満のローエンド3Dプリンタと60万円以上の産業用ハイエンド3Dプリンタの二極化が進んでいる。出荷台数を牽引するのはローエンド装置で、簡易かつ迅速に試作を行うための導入が進む他に、ものづくりの現場でエンジニアらが3Dプリンタの扱い方を学ぶため、教育機関での導入が増加基調にある。それにより、2016年の3Dプリンタ出荷台数(同ベース)は、前年比84.2%増の35万台になると予測する。また、産業用のハイエンド3Dプリンタは、航空宇宙、自動車、医療、家庭用電気製品などの分野を中心に最終製品の造形に向けた導入が拡大基調にある他、造形サービス事業者(サービスビューロー等)での導入が増加している。3Dプリンタで造形するものの量が増えるとともに、追加で装置を導入する企業やよりハイエンドの装置にリプレースする企業も増えている。3Dプリンタの性能は近年、かつてないスピードで進化している。装置の性能向上、新しい材料の誕生、製造現場などへの更なる普及により、市場は今後も大きく拡大する見通しである。

これらを背景に、世界の3Dプリンタ出荷台数は、2013年から2019年までのCAGRは77.0%で推移し、2019年における出荷台数(同ベース)は215万台になると予測する。

図 1. 3Dプリンタの世界市場規模推移と予測

		単位: 台						
		2013年	2014年	2015年	2016年 予測	2017年 予測	2018年 予測	2019年 予測
出荷台数		70,000	110,000	190,000	350,000	650,000	1,200,000	2,150,000
	対前年比	—	157.1%	172.7%	184.2%	185.7%	184.6%	179.2%
	CAGR	—	57.1%	64.8%	71.0%	74.6%	76.5%	77.0%



矢野経済研究所推計

注 1:メーカー出荷数量ベース

注 2: 2016年以降は予測値

注 3: CAGR は 2013 年から当該年までの年平均成長率

## 2. 注目すべき動向

### 2-1. 日本国内の3Dプリンタ市場について

日本国内においては、2013年下期から2014年にかけて起きた3Dプリンタブームの中で、3Dプリンタに対する正確な知識を持たないまま導入するケースも多数みられたことなどから、3Dプリンタに対する過剰な期待が大きな落胆へと変わったと言われている。

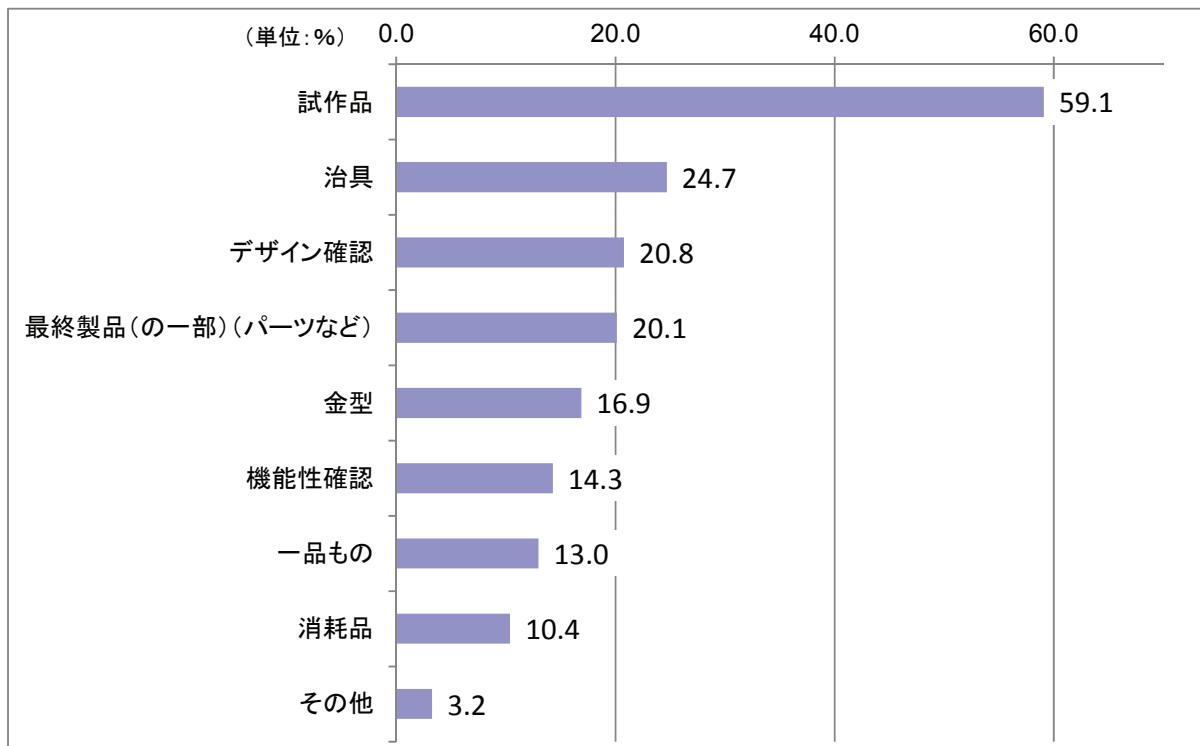
そのため、2015年は世界市場で牽引役となったローエンド装置を中心に出荷数量が伸び悩んだ。一方で、産業用のハイエンド3Dプリンタに関しては、ユーザーの装置に対する正確な知識も浸透しはじめ、ものづくりの現場における本格導入が日本国内においても堅調である。また、自動車分野や金型製造業、造形サービス事業者等を中心に、3Dプリンタの活用が盛んである。

### 2-2. 日本国内での3Dプリンタユーザーの動向～造形しているもの/用途

本調査に関連して、日本国内での3Dプリンタユーザーへのアンケート調査を2016年10月に実施した。現在3Dプリンタを利用している者、もしくは過去に3Dプリンタの利用経験を持つ154人に対して、3Dプリンタで造形しているもの/用途について尋ねた。

回答のトップは「試作品」で59.1%であった。今のところ、3Dプリンタの活用は未だ試作が中心だが、「治具」が24.7%、「最終製品(の一部)(パーツなど)」が20.1%、「金型」が16.9%と続いており、アンケート調査の結果からは、国内においても3Dプリンタを用いた本格的なものづくりが始まりつつあると言える。

図2. 日本国内において3Dプリンタで造形しているもの/用途



矢野経済研究所作成

注4: 調査期間:2016年10月、調査対象(集計対象):日本国内で、現在3Dプリンタを利用、もしくは過去に利用した経験のある人154名、調査方法:インターネットモニターを利用したアンケート調査、複数回答

※参考資料:「3Dプリンタ材料の世界市場に関する調査を実施(2016年)」(2017年1月31日発表)

<http://www.yano.co.jp/press/press.php/001648>